

令和7年第2回滋賀県社会教育委員会議 概要

〔日 時〕 令和7年1月30日（木）

14:30～16:45

〔会 場〕 滋賀県東館7階大会議室

【出席委員(委員名簿順)】

中北 隆尚 委員	川端 一 委員	橘 円 委員	藤原 麻美 委員
平松 成美 委員	岨中 庸子 委員	内山 淳子 委員	上田 洋平 委員
角出 好隆 委員	中村 一彦 委員	梅村 亮介 委員	(11名)

1 開 会

- (1) 議長挨拶
- (2) 資料、日程説明

2 議 事

- (1) 令和7年度社会教育関係団体・機関等への補助金交付について
- (2) 審議テーマに係る協議
「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について」
～学びを通じた地域社会のつながりづくり～
○事業の評価、研究調査についての意見交流
- (3) 次年度の審議、現地視察等について

3 その他、諸連絡

4 閉 会

- (1) 課長挨拶

【配付資料】

- 資料1：令和7年度社会教育関係団体・機関等への補助金交付について
- 資料2：Zoom 会議の情報交換シートまとめ
- 資料3：これからの社会教育の役割で重要となること
- 資料4：評価指標
- 資料5：令和6、7年度の審議について
- 資料6：令和6、7年滋賀県社会教育委員会議イメージ
- 資料7：令和6年度 滋賀県社会教育委員会議年間予定 概要

1 開 会

(1) 議長挨拶

- ・本日は、これまでの議論を事務局でまとめていただいたものをもとに協議する。今後の方向性を見定める視点ともなり得る。
- ・家庭教育支援実践交流会の講師、滋賀県SSWSV上村文子さんが「つながりこそ最大の資源」と仰った。滋賀のめざす社会教育の具現化につなげていきたい。

(2) 資料、日程説明

2 議 事

(1) 令和7年度社会教育関係団体・機関等への補助金交付について

生涯学習課 川口（資料1の説明）

- ・社会教育法第13条「社会教育関係団体へ補助金を交付しようとする場合は、社会教育委員の意見を聴いて行わなければならない。」の規定に基づき、資料1 No. 1～No. 7およびNo. 13-③を生涯学習課、その他は子ども若者政策・私学振興課より説明。
- ・補助金額については未確定のため、資料には令和6年度補助金額を記載。
- ・令和7年度の予算要求に際して、今年度交付の補助金の活用状況や事業効果等について、団体ごとに個別に精査するとともに、次年度の活動予定等の確認を行い、より有効な補助となるよう努めている。
- ・補助内容は、主に各団体が実施する会員の資質向上の取組や活動の活性化を図るための研修会の開催、広報誌の発行といった内容となっている。
- ・団体との事業連携も含め、活動の意義、効果を明確にし、目的に沿った事業に補助金を充てるように、事業や大会への参加、事務局への訪問を通して、確認や助言を行っている。

子ども若者政策・私学振興課 金畑（資料1の説明）

- ・資料1 No. 8～No. 13-②、No. 14が、子ども若者部所管の補助金。
- ・現在策定中の次期「淡海子ども・若者プラン」において、子ども・若者の主体的な地域活動や社会貢献活動等を促進するため、青少年団体のリーダーや主体的な活動の指導者となる人材の育成を推進するとともに、団体等の横繋ぎの取組を推進しようとしているところ。
- ・令和7年度も、これまでと同様、県の青少年施策を補完し、県域で活動を展開している7団体に対しての補助金交付を予定。
- ・補助内容は、主に青少年の健全育成に資する取組や広報誌、啓発資料の作成、また各団体の会員や団員のスキルアップを図るための研修会、青少年リーダーや指導者の育成に関する事業の実施、各種大会等への派遣補助といった内容になっている。このほか、来年度は全国の青年団OBと現役青年団が情報交換・交流などを通し、地域の青年教育力の向上や青年活動の振興に寄与することを目的に本県で全国青年団OB大会が開催されることから、No. 14の補助金を交付予定。

※質疑応答

中北委員

滋賀県社会教育委員連絡協議会への以前より補助額が低い。オンライン等を活用しておられることもあるが、活動への影響は大丈夫か。

生涯学習課 川口

団体のやりくりとしては厳しい。オンラインを活用したハイブリッド形式で研修会を実施されることは、参加者が多様な方法をセレクトできるよさがあり、県でも推奨している。そうした工夫をしながら、団体の活動をされている。

川端議長

当該団体の会長を務めている。県からの補助金だけでなく、参加する市町からの負担金もあり、その中で運営をしている。

※その他質疑なし

(2) 審議テーマに係る協議

「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について」

～学びを通じた地域社会のつながりづくり～

【事業の評価、研究調査についての意見交流】

生涯学習課 川口（資料2の説明）

- ・ 12/12, 16, 17の3回に渡ってZoom会議を行った。事前あるいは事後に、各委員から研究調査活動についての情報交換シートを提出いただき、それを一覧にまとめたものが資料2。
- ・ 1枚目は、生涯学習課、団体の事業・研修等をまとめたもの。
- ・ 2枚目は、各委員の実践や、参加された各地の様々な活動をまとめたもの。
- ・ 1枚目の左側は「A 学びを通じた地域社会のつながりづくり」で、今期審議テーマに関する部分。提出いただいたシートの内容を、①②③の項目に事務局であてはめた。
- ・ 右側は「B 誰一人取り残すことのない教育の実現に向けた生涯学習・社会教育の役割」で、各委員からの評価や意見等を、前期社会教育委員会議の報告書に記載された3つの項目に事務局であてはめた。
- ・ 右側のBについては、今後の施策に活用させていただくこととし、本日は左側のAに関することと、2枚目の各委員の実践等を中心に協議を進めていただきたい。

川端議長

委員の皆さん御自身のことで補足などはあるか。また、他のところで質問などあれば。

中村委員

岨中委員の図書館の活動のところに注目した。今年の1月の日経新聞に能登半島にある珠洲市の図書館の話が出ていた。子どもたちや地域の方、仮設住宅の方を含めた被災者の方の本当の居場所に今なっているということ。この居場所づくりの取組は非常に大事だと思う。

平松委員

「おいでやす中主小フェア」に参加した。地域のいろんな団体が参加されていて、それぞれの活動をリニューアルされた小学校の教室を使いながら紹介されており、すごい取組であ

った。あれだけの方々、団体、ボランティアが一つになって作り上げた過程も機会があればお聞かせいただきたい。マキノは小学校が統合する計画があるので、ぜひ参考にしたい。

川端議長

大人にもっと学校を使ってほしいという思いから始めた。学校を知れば、もっと子どものことも知ってもらえる。子どもにも、地域の方にも、先生方にも、みんながウィンウィンになればいいなということで、学校の工事が完了して教育委員会の方で見学会をされたが、それだけではなく、みんなが自分たちで運営する、そういうお披露目会にしようということで始めた。準備をしながらどんどんアイデアが広がっていった。

来年もやろうと運営してくださった方々が声を上げてくださっており、来年9月の中頃の日曜日に実施することが決まった。

岨中委員

先日、県の家庭教育支援実践交流会で竜王町の取組を発表させていただいた。図書館が多世代いろんな人が集まれる場所にしたいという思いで、竜王町立図書館で焚き火のイベントがあった。家庭教育支援で連携している団体さんも参加されており、家庭教育支援からさらに発展して、図書館員さんだけではできないことを民間の団体と連携してされているのがすごくいい取組だと思う。居場所になかなかつながれない人に、なんとかアプローチしたいという思いがある。そういう活動を企画しても、そこにつながれない人、つながりでしんどくなっている人に、私はSSWとして関わっているが、上田副議長が以前仰った「つながりはつながりで治していく」ということを大事にしたい。そのつなぎ役が大事なかなと思う。

上田副議長

「つながりが病んでいるなら、つながりで治していく」ということ。

「大人が学校を使いこなす」という川端議長の話のように、そういうこともあっていいんだと思う。学校が子どもの安心安全をきっちり守るっていうことも大事だと思うが、学校は子どもだけのものではなくて地域のものであり、それをうまく大人の社会、地域社会が使いこなせるようになるといいなと思う。

公園作り等に関わっているが、公園が「禁止」ばかりになっている。岐阜のある施設では、「禁止することを禁止する」というルールを作っておられ、みんなでルールを考えながら使いこなしていこうというやり方をされている。「空間メディア」という言葉がある。人と人をつなぐための重要なメディアとして、場所・空間は非常に重要な役割と力を持っている。学校という場所もそういう役割があるのではないかな。川端議長の実践の中にもそれがあったと思う。

最近、焚き火が流行っている。県立大学でも「焚き火トーク」をしている。火を焚いてポツポツとみんなが集まってきて、ただしゃべる。目的にとらわれすぎずに。焚き火をするにも、いろいろハードルがある。事務当局からは、焚き火は駄目ですと。バーベキューだったらいいらしい。何か目的があって火を使ってするのはよいが、ただ焚き火をするのはだめ。

何でも目的とかにとらわれ過ぎている部分があることに気づく。だから最近、どこなら焚き火ができるのかと考えている。たとえば、思考実験として、最もハードルの高いところ、市役所の屋上で焚き火をしていいですかって聞いてみたらどうか。そういうことをやりながら、ここでもこんなことしていいんだ、しかしルールは自分たちで作るという気づきや思考を大事にしている。目的から離れて、火を囲んで対話するっていうことが、おそらく可能になる。そういう時間もあっていいなと思う。今日は焚き火がありませんが、焚き火があるかのごとく皆さんからいろいろ御意見をいただきたい。

【これからの社会教育の役割の重点・評価指標についての意見交流】

生涯学習課 川口（資料3の説明）

- ・第1回会議、Zoom会議でいただいた御意見は、いずれも今期の審議テーマ「地域への誇りと愛着を育む社会教育のあり方について～学びを通じた地域社会のつながりづくり～」に基づき、交わされたもの。特に今年は、委員の皆様研修会や各地での取組に主体的に御参加いただき、研究調査活動をすすめていただいた。本日の第2回会議以降、よりのを絞った審議を皆様に進めていただくために準備したのが、この資料3。
- ・Perplexity AIに、今期の審議テーマ・サブテーマ、各委員の意見や発言を入力し、これからの社会教育の役割で重要となることを5つ以内のキーワードで示すよう指示を出し、まとめたもの。つまり、ここまでの滋賀県社会教育委員会会議での協議をもとに、これからの社会教育のあり方を分析し、まとめた資料である。

川端議長

これまでの議論をAIを使って整理することにチャレンジいただいた。私はZoom会議に3回とも参加をしたが、私なりに、キーワードは3つだった。

一つめは「地域」。滋賀県全部で同じことを一律にするのではなくて、それぞれの地域の実情に合ったものを工夫して生み出していくこと。

二つめは「人」。参加する人、企画する人、人材。

三つめは「場所」。居場所、体験の機会、学習の場。

AIもそれを踏まえてくれているように思う。皆さんはいかがか。

梅村委員

AIを使うのはいいなと思う。私も会議や仕事で使う。AIに入力した質問もめちゃくちゃいい。社会教育も、数値化できるといいと思っていた。この「【評価指標】地域への誇りと愛着を育む社会教育チェックシート」はいい案だと思う。書いている内容については、まさしくこの前議論したことだと思う。特に「1. 体験格差の解消」「5. つなぎ役の育成」は関心を持っている部分なので、自身の法人でもやっていきたいことが書かれていてよかった。

「これからの社会教育の役割」という表現になっているが、これからでなくても、これまでも言っていたことなので、この時代において社会教育に必要な要素は何か、もうちょっと見えるとよいと思う。よりこれからの社会教育だからできることは何か、みたいなことは

もっと考えていきたいと思った。

特に5の重点に関しては思う。今までは、自然に地域の中に自治会とかお節介をしてくれる人とかがいたが、それが崩れ、縮小する中で、つなぎ、行動してそういう人をつくっていく必要が出てきたように思う。社会教育士もそういう流れだと思う。この重点は、特にこれからだからこそ、という要素かなと個人的に思う。

内山委員

大学で社会教育の授業をしている関係から、学生の思いを伝えたい。受講生は、日頃から教育系のボランティアに参加するなど、教育に関心をもっている人が多い。例えば地元の図書館によく通っていたり、学童や小学校の放課後児童支援のボランティアをしたりして、子どもたちとのふれあいにやりがいを持って実践している。しかし、地域とつながっているという実感はほぼ持っていない。そこで授業の中では自治体計画や教育計画、あるいは事業実践などを調べていくことで、自分のしていた活動のコンセプトや自分の通っていた図書館の位置づけが、大きな枠組みの中で徐々にわかっていくことができるように思う。そうしてもっと広い視野で自分の活動を見つめることができる、あるいは自分の地域の図書館に誇りを持つことができる。そういった相対的な視点ができていくことがあると感じている。

これを今日の会議になぞらえると、地域と取り組むというところ。リーダーの方ははっきりとした目的を持って活動されていると思うが、そこに参加する方は、事業への参加自体はとても有意義だと感じてお帰りになるけれど、これが市町の中で地域づくりあるいは子育て支援につながっているというところまでは御存知ないのではと思う。

横のつながりがもてるような他の事業を告知するとか、全体の計画を何かの機会に知っていただくとか、そういったことも併せて皆さんにお知らせしていくと、自分が参加したものはどういう位置づけだったのかということがわかっていくのではないかなと思う。それがひいては、参加する人が次の企画をする立場の人となっていく。そういった種が生まれるかもしれないというふうに感じている。

例えばPTAがどういうふうに地域につながっているのかということが分からないまま、活動に参加する時間が取れないと考える人があるかもしれない。しかし少し広い視野をもって活動をすることで、実践者と参加者がつながるのではないかな。いわゆる目標というのはAIでも導き出すことができるが、参加者も目的を実感できる、そういった実感というのはなかなか目標だけでは感じ取れないことがあると思うので、次世代を担う方をつくるためにも、参加者に大きな枠組みを知っていただくことも必要かなと感じる。

川端議長

資料3の5つの重点については、この後のグループ協議でも意見を交えていただきたい。さらに視点を評価指標として整理をしていただいている。資料4の説明を事務局からお願いしたい。

生涯学習課 川口（資料4の説明）

資料3にある5つのキーワードについて、具体的な指標をもって評価していく必要があるのではないかと、事前に川端議長、上田副議長と相談させていただいた。Perplexity AIにさらに指示を出し、評価指標を導き出したのがこの資料4。これからの社会教育で重要となることの5つの重点それぞれに、3つずつの具体的な評価指標が挙げられている。各項目を5段階で評価し、入力すると、レーダーチャート化して表示されるようになっている。こちらは事務局で作成したもの。視覚化することにより、取組の強みや弱みが捉えやすくなる。

川端議長

グループのメンバーの皆さんで、自分の取組の範囲で評価指標を見ていただきながら、5段階で点数をつけるならどうなるかを机上のPCを使って作業いただきたい。「この表記では少しつけにくいけれど、もう少しこういう表記に変えた方がよいのではないか」ということも出てくるかもしれない。まず触れて、やってみて、AIがまとめた内容について、我々の意見を述べていきたいと思う。

上田副議長

少し補足を。AIが出す答えに対しては「違和感」が大事だと思っている。これが正しいとかそういうことではなく、答えを出してきたものを見たときに、「何かちょっと違和感がある」というところが議論の出発点だと思う。ぜひその違和感を共有しながら、そこからその正体は何なのか、足りないものがありそうだとか、議論を進めていくことを大事にしていきたい。

それから、梅村委員が仰ったように、AIが出す答えは、過去、これまでの経験、これまでの成果に基づいた整理。未来を思い描いて先取りしながら考えるのが、私たち人間だと思う。AIはあくまで補助として。過去のを基に、速くまとめる、整理するというのは非常に得意で、我々の労力をAIが省略してくれた。その分、未来を思い描いてどういうことをしていけばよいのかという部分に、我々は力を注いで考えていく。AIが描けない未来を考えるというふうに捉えていただけるとよいと思う。

それから、評価指標は決して優劣を競うものではなく、これを基にコミュニケーションするツールとして考えるということ。点数をつけるのが目的ではない。「ここちょっと弱いところがある。それなら私はこっちに強みがあるから一緒に取り組むのはどうか」というような議論をするために可視化する。そういう意味での指標と考えていただけたらと思う。

梅村委員

この評価のイメージは委員個人の自己評価で点数をつけるのか、何かの取組か、滋賀県が取り組んでいる社会教育を評価するのか、何に対しての評価なのかの確認をしておきたい。

川端委員

委員の皆さんの取組に対しての評価でどうか。

梅村委員

委員である自分自身の評価でよいかなと思う。県や何かの取組だと、結局皆さんが得ている情報の差が大きくて、同じような意見交換にならないかなと思う。自分のやっていること、イベントでもいいですが、自分の行動・活動がどうかというのでいいかなと思う。

川端委員

では自分の取組をお願いします。ここからは各グループで作業いただきたい。事務局の方もグループに入ってください。

※オンライン1グループ、会場3グループに分かれてグループ協議

【休憩】

【全体討議】

中北委員

学校教育枠の委員の立場から話したい。「5. つなぎ役の育成」にある「触媒」は、人材だけでなく、組織もそうではないか。キーマンは必要だが、持続的かつ安定的に取組を継続するためには組織が大切。学校で言えば、学校運営協議会やまちづくり協議会。レーダーチャート化されることで、取組の現状を再認識できる。

内山委員

重点事項のそれぞれに、評価指標が3つずつあることでわかりやすくなった。グループで話し合ったところ、「5. つなぎ役の育成」では、コーディネーターなどの支援者の育成はできているが、実際に活用しているかどうかは次のステージなのかもしれない。支援者や参加者が、いかに当事者意識を持って、もう一人誰か参加者を増やすような、そういった草の根の活動のようなものが、活用につながっていくのではと感じたところ。

平松委員

AIへの違和感で言うと、どの項目にもあった。評価指標がわかりやすく、深められる。

重点1では、「体験の機会を提供する」の部分で、学校外で学びや体験の場を増やすというのではなく、学校の中でしか体験できない子も本当にたくさんいるので、そういう子にとって、この表現はちょっと違和感を持った。

それと、重点2では、「交流できる場を創出することが重要」で、「これにより地域への愛着や誇りが自然と育まれる」の、「自然」という言葉に引っかかった。先ほど内山委員が、参加者が企画者になっていくところには、単にその場があるだけではなくて、その人がどう関わっていくかというところの視点が大事と仰った。そういう観点からも、その表現に引っかかった。

重点3では、「公共施設を活用して」の部分で、それは今、割と進んでいるが、場所というのは、10人いれば10人とも心地よい場所がそれぞれ異なるもの。公共施設だけではない。広く市内にいろんな場があるという視点が必要かと思う。

重点5については、中北委員が仰った「触媒」と同じである。

岨中委員

「できます」という表記に、「なぜできるのか」という違和感はある。3つの評価指標に当てはめてみて、なぜその評価なのかを話し合うことで答えが見つかるのかなと、これまでの皆さんの発言を聞いて明確になったと思う。

中村委員

AIが示した5つの重点事項が美しすぎる。しかし、こうした指標があることで自分自身を振り返ることができる。自分の至らなさを痛感した。我々の業界では、やはりお客様との連携というのが非常に重要だと思う。例えば、我々のできるところで、体験の機会をたくさん作るというのは当然できるが、つなぎ役、地元の連携をもっとやっていきたいと思った。

世の中にはたくさんのスキル、知識や経験を持った中高年の方がおられる。しかし、関わり方がわからず悶々としている人もたくさん知っている。社会教育委員の皆さんには、すごいつなぎ役の方が多いと思う。そういう民間人材の活用というところ、これがやはり学校や放課後のいろんな関わり方にもつながっていくのかなと思う。採点をしながらそう思った。

藤原委員

Bグループは、家庭教育、企業、青年団と、活動のフィールドが異なり、それぞれの活動をレーダーチャートにすると、強み・弱みかわからないが、凹凸がばらばらな印象だった。だからこそ連携すればいい五角形のチャートに近づくように思う。

AIは、「～なことをすると、～ということができます」というふうに書いている。しかし、この具体的な取組というところは、どういうことができるのかというのを話し合っていくのが人間かなと思う。そこにはやっぱり過去の実践や、それぞれの実践が活かされると思うので、ここの肉付けを人間の頭でやっていければよいかなと思う。

橘委員

とりあえず評価の体験してみて、というところから一つ。梅村委員と私で全然興味と関心が違った。自分の活動を評価していくときに、重点事項5つと、さらに3分割されている評価指標に、どう当てはめて評価していくかというところでまず迷った。そのときに、実際にいろいろな活動をそれぞれがしているので、それぞれがどういう領域に興味を持っているかという観点でチェックを入れてみた。やってみて思ったのは、足りない部分は別のところにアウトソーシングしていけばいいなということ。私がオールラウンダーである必要もないし、足りなければ得意なところとつながる。それがまさに「連携する」ということだと感じた。それと、AIがつくったこの5つの重点は、「1. 体験格差の解消」では、まずどんな体験を

求めているのか、どんな体験をさせるのかというところは、人間が考えていかないといけないところかと思う。その観点がちょっと取りこぼされている気はしている。

それと、先ほど上田副議長が仰った焚き火の話もそうだが、知性というか活動へとつなぐ言葉を持っている人がいないと、その思いを実現することができないのだろうと思う。その言葉を紡ぐ人が「つなぎ役」なのかなと思った。焚き火がなぜ大事なのか、焚き火をすることで何を求めているのかということを言語化する人が、やっぱり必要なのだろうと思う。例えば、学校に行って子どもたちの話を聞いていると、「こんなんしたい」と思いつきはいっぱい言う。大人の会議でも思いつきはいっぱい出てくる。断片的にはいっぱい出てくるけれど、それを構築して一つの考えとしてまとめ上げる人材がいなければ、考えが一つの完成形にならない。ならなければ、それを取りまとめている行政だったり、その建物の管理者だったり、その責任を持っている人たちにメッセージが届かないし、実現しない。そうならば、いつまでたっても思いつきだけでぐるぐる回ってしまう、ということなのだろうかと、全体を見通して少し思った。

梅村委員

レーダーチャートでそれぞれの取組の違いがよくわかっておもしろかった。私は割と体験機会やつなぎ役の育成に関心があり、そこに寄っている。一方、橘委員は、居場所づくりがすごく高く、このチャートによって違いがすぐに分かる。評価指標が具体的にになればより点数がつけやすいかなと思う。

情報交換シート（資料2）の中で、川端議長が地域幸福度の指標について書いておられた。社会教育は次のステップに進むためには、数値化することが大事だとすごく思う。今回のこのワークショップで数値化してみる実践ができてよかった。

社会教育でこんなことをした、こんな人と会えた、これだけの人が集まった、こんなことを学べてよかった、というケースが多い。それをただ単発でやっているだけでは進まないなと思っていて、「この部分はこれだけでできていた」みたいなことが、こうして数字で見えると、社会教育が発展していくきっかけになるのかなと思う。数字にとらわれる必要はないが、意見交換の材料として数値化するのは、今後すごく大事だと思う。

個人で評価するときには、「できている・できていない」よりも、「関心が高い・低い」という関心の指標であった方がよいと思う。そこに関心を持てていなかったから、次に何かやるときはそこに関心をもって…となることで、例えば、関心が低い分、関心の高い人と一緒にやろうとするような、何かきっかけになればよいかなと思う。

これが県・市の社会教育に対する施策とか現状把握という意味では、「できている・できていない」でそれぞれの取組を評価して一つのチャートに起こしたときに、「居場所づくりのところ弱い」みたいにつかめる。同じチャートでも、違う使い方ができると思った。

角出委員

まずAIがまとめた文章を初めて見せてもらった。こんなに上手に文章をまとめるのかと感心した。「自分が関わっているか」ということで、評価してみた。自分が関わっていない分

野があるなど思いながら、そのあたりを反省しながらグループで話をさせてもらった。

しかし、社会全体を見たときにどうかと考えると、自分の評価結果とはちがうなと思うこともあり、いろんな方がいろんな形で関わってくださっているというのは、一昔前に比べると全然違う世界になってきて、それが一つ大きな変化としてありがたいなと感じた。こういう体験は初めてで面白かった。

上田副議長

まず「違和感」のことで平松委員が仰った「体験は学校だけじゃない。学校内外で必要」と、「愛着や誇りは自然と育まれ、強制するものではない」について、愛着や誇りがよい形で生まれ、育まれる環境をつくることは必要だけど、そこから生まれるためには、触媒になる人が何か働きかけるということがやはり大事だなと思った。それから「10人いれば10人違う居場所がある」というのも、まさにその通りだと思った。

中北委員が仰った「人がつなぐだけでなく、組織がつなぐ」ということもそうだなと思った。橘委員が仰った「言葉を紡ぎ、つないでいく」「思いつきを言語化していく」というところとか、ある種翻訳をしていくことができる人材が必要なのだなと思った。

皆さん「採点してみて…」と仰ったが、決してそういうものではない。むしろ関心というか、角出委員が仰った「関わりの度合い」という形で考えていただきたい。採点ではなく、「数値化してみる」という形でも考えてよいのかなと考える。Do指標とBe指標みたいな形で評価する。「できる・できない」ではない観点は、こういった場合は必要だと思う。

川端議長が資料2のシートに書いておられた「地域幸福度指標」は、県立大学の「近江環人地球再生学座」という人材育成プログラムでの私の講義に川端議長も参加していただいたときのこと。デジタル庁が「ウェルビーイング指標」というのを作成した。ウェブですぐにウェルビーイング指標は出てくる。全国の市町村に関して、ウェルビーイングを今回の評価指標のように、いくつかの指標でチェックするというものがリリースされている。大津市、彦根市など、それぞれの指標が見られる。これもやっぱり「できている・できていない」とらわれ、よく議会などで「できていない。どうする…」と扱うが、そうではなく、これを使ってコミュニケーションするのが望ましい。ウェルビーイングに関しては、主観的指標と客観的指標というのがある。オープンデータで、国勢調査等でわかっているものなど、全国共通のデータを基に客観的にわかったウェルビーイング、幸せ度、幸福度、地域の幸福度を調べるのが客観的指標。アンケート等を市民にされて主観的幸福・客観的幸福について調べるのが主観的指標。例えば、客観的に見ると充足しているのだけれど、実は市民にアンケートをとると結果に乖離がある、ということがあり、主観と客観を比べることで、その差を見ながら議論をすることに使う。ぜひ見ていただくといいかなと思う。

オンライングループでの議論の中で、最近1泊2日とか2泊3日で、どこか自然の中で体験するとか、火を一生懸命起こすなど、そういうことが減ってきているというようなことを角出委員が仰った。全然違うところに話が飛ぶが、私の知り合いで大学生の居場所づくりをしている人がいる。大学生を家に泊めてご飯食べさせたりしている。布団の上げ下げとか、生活する上での細かいことを伝える、お節介焼きのおじさん・おばさんみたいな役割をして

いる方がおられる。一緒に生活をしてみて気づいたのが、「お先にお風呂いただきます。」の声かけなどのちょっとしたことをはじめとして、家族以外の他者と共に生きていくためのマナーがだんだんできなくなっているのではないかということ。その人が言うのは、最近、「第三の居場所」のように、居場所を家の外に作るが、家の中に第三者や家族以外の他者が入ってくる、という機会がないということも問題なのではないかということ。つまり「自分の家のルールが他の家とは違うということに気づく機会がない」というのも、実はもう一つの問題ではないかということ。お父さんが自分の部下を家に連れてきて、朝起きたら知らない人と朝ご飯を食べている、みたいな機会が全然ないねとも話している。家もプライベートな憩いの場なのかもしれないが、そこに時々、他者が入り込んでくるという経験の中で、自分のルールが絶対じゃないということに気づく経験になる。ひょっとして自分はヤングケアラーなのかな、みたいに、自分では世間もよその家もそういうものだとおもっていたけれどよその家と比べてみたら、どこか違うのではないか、おかしいのではないかと気づく機会もない、という話も聞いた。居場所というのは、そういうところも含めて考えた方がよいと思う。

AIは確かにきれいにまとめるが、具体的な部分をこれから事例を出し合い、見学をし合う中で、この重点や評価指標を基にしてより豊かにしていけたらいいと思う。重点1の体験機会の提供で、「経済状況に関わらず全ての子どもに」という部分だが、県内で実際に取り組んでいるところはどうだろうということを、ぜひ私は皆さんから聞きたいと思う。そういうところに取材やみんなで見学に行き、あわよくば事例で話してもらったりできるといいなと思う。

川端議長

あと一年半ほど我々に任期がある。今、我々がこの社会教育を通して、私たちの最後の一つのゴールを示すものとして、こういう重点や評価指標も出してみてもどうかというチャレンジをしてみたいなとも思っている。

何となく社会教育委員会議で集まってよかった、話ができてよかったのみにとどまらず、それで次どうするのか、この機会が次にどう役立つのか、この学びの機会は何がもう少し補強が必要だったのかななどを分析していくという、一つの素材として提案できたらいいなというゴールをイメージしながら皆さんとやってみた。まだまだ中身を詰めていきたいと思う。

「1. 体験格差の解消」の中で、子どもたちには多様な体験は必要だけれども、我々大人も体験することはもっともっと必要だろうと思う。ここは子どもに限定しなくても、大人も含めてよいと思ったところ。上田副議長のから話があったように、実際に中身をどう進めていくのか、具体的なことは何するのかということは、やっぱり私たち人間が一生懸命にいろいろ知恵を絞り、いろいろな情報を集めてくることが大事かと思う。そういう意味で、あと一年余りのこの会議の中で、是非こういうところへ行って学び、情報を得たい、実は我々もここで何かを体験してみたいという候補でもよいので、最後にいくつか出していただけるとありがたい。それが議題（3）になる。事務局から説明を。

(3) 次年度の審議、現地視察等について

生涯学習課 川口（資料5、6、7の説明）

この3つの資料はいずれも第1回会議で確認いただいたもの。次回会議は5/29（木）となる。今後の進め方を確認いただければと思う。

橘委員

普段学校で活動しているので、青年団活動の現場、青年が活躍されている場などを見てみたい。

藤原委員

8月に青年団の県大会がある。各市町の青年団で、例えば子どもに対する取組とか、守山市でも職業体験の事業などもあるので、現場を見ていただくのがいいかなと思う。各市町の青年団の方の活動は、主に土日。視察などをするには相談が必要。知っていただけるのは非常にありがたい。

橘委員

土日の視察では行政側の負担が大きい。委員各自が研究調査活動として出かけるのはどうか。訪問先には事前に、こういう人が来るかもしれないと伝えておき、お邪魔していいですかみたいなスタイルで。

藤原委員

可能である。

上田副議長

梅村委員の取組も興味深い。平松委員の絵本の取組も。委員それぞれに思いがあるので、別途意見を出していただき、それをもとに議長と事務局と相談しながらみんなで行くところや個別に行くところの情報提供をするとか、そういう形で進めるのはどうか。

川端議長

期間を設け、皆さんから情報を集めたい。2/14（金）までに事務局へ送付をお願いしたい。それを踏まえながら、議長、副議長、事務局で絞らせていただくということでよいか。

平松委員

次の会議は5月だが、見学や視察をする時期はいつ頃ぐらいまでとかはあるのか。

生涯学習課 川口

前期の委員は、11月に現地視察をされた。委員皆さんで視察をするならば、現地視察として計画をしてもよい。各自で行くことも、県庁バスを利用することも可能。5/29の会議で、

どなたかが事例を紹介いただくというのもあり。夏場に研究調査活動として各自それぞれに視察に行っていたいただいてもよい。

川端議長

では、事務局に進行をお返しする。

3 その他、諸連絡

4 閉 会

(1) 課長挨拶

(2) 事務連絡